

鳴るたびに秋の風鈴とぞ思ふ

藤田湘子

風鈴も懐かしい物のひとつとなった。昔の家屋では当たり前前だった物が、今は季節のイベント等での風物詩となった。

「風鈴のひつきりなしも困るなり」という湘子の風鈴の句も、つい口に出る愛唱句である。あまりに暑い日は、風が吹くたびに鳴り続ける風鈴の音がかえつてうるさく、涼を呼ぶどころか暑苦しいこともある。

そんな日々の中で朝夕の風の音に秋の気配を感じる頃、風鈴の音にも、秋を感じる作者がいる。鳴るたびに、「ああ、秋の風鈴だなあ」と思いながら聞いている。もちろん、その背後には、蛇笏の「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」の句の世界がある。

1686年 (558.09.11作) 第六句集『一個』 鑑賞・野本京